

ストリートファッション出現色比較研究 (3)

—原宿・渋谷・銀座にみる服装色の地域差に関して—

Color Appearance Frequencies in Street Fashion (III)

- The study on Area Difference of Clothes Color in Harajyuku, Shibuya, Ginza -

渡辺明日香
城 一夫

共立女子短期大学
//

Asuka Watanabe
Kazuo Jo

1. 目的

当研究室では、月に一度、東京都内の主要なファッションストリートである原宿・渋谷・銀座において街頭での定点観測を実施し、若い女性のファッションを対象とした服装色の継続調査を行っている。今回の研究は、1994年5月～1999年12月までの5年と3ヵ月にわたるストリートファッションの服装出現色の原宿・渋谷・銀座3地点での地域差に着目し、それぞれのストリートにおける服装嗜好色の違いを明らかにすることを目的としている。

2. 調査方法

本調査では1994年5月～1999年12月の毎月1回、第1週目の土日、又は祝日の11:00～16:00の時間に、原宿（ラフォーレ原宿・表参道周辺）、渋谷（東急109・センター街周辺）、銀座（和光・中央通り周辺）にて定点観測を行ない、服装及び服の色にトレンドが反映されやすいと考えられる若い女性の写真撮影をした。得られた写真からアイテムの色（原宿7,453点、渋谷7,141点、銀座6,347点、総計20,941点のアイテム数）をカラーコードJCC40（JAFCA COLOR CODE40）と照合させ集計し、調査データとした。

3. 調査結果・考察

3-1. 色相における地点別の服装色の相違

・色相における共通の傾向

過去5年間の全アイテムの色のなかで、出現頻度が3地点ともほぼ10%を超え、頻繁に登場する色はBROWN、BLUE、WHITE、BLACKである。これらの色は、ベージュ系のスーツやブルーのGパン、白のTシャツ、黒のパンツなどいずれも他のアイテムと調和が取り易いベーシックなアイテムに多く用いられる色であり、この4色で着用アイテムの4割以上を占めている。次に出現頻度が5%を超えたものには、ベースカラーのCOLORED GLAY、GLAY、アクセントカラーのRED、YELLOWなどがあげられる。（図1参照）

・原宿・渋谷・銀座の地点別の色相の相違

地点別の違いをみると、どの色相でも原宿と渋谷はほぼ類似しており、銀座のみ異なる場合が多い。原宿は、トレンドに敏感な中学生から高校生くらいのティーンカ

らヤング層が多く、パンク風やDCブランドの熱狂的支持など特有のスタイルがみられ、上下でコントラストのある組み合わせが好まれる傾向が強いためか、RED、YELLOW GREEN、GREENが高く、BROWN、COLORED GLAYの割合が低い。渋谷は、高校生や専門・大学生、フリーターなどの20歳前後のヤングが多く、原宿同様RED、BLUEの割合が高い。単品着回しのカジュアルファッションが中心だが、全身を同一、ないしは鮮やかなトーンの類似色相でまとめたり、白と有彩色とを組み合わせる傾向がある。銀座は、20代のOLや30代のキャリア女性を中心に、仕事着の延長のコンサバティブなワンピースやスーツが多く、全身同じ色調やグラデーションでまとめるためか、BROWN、COLORED GLAY、GRAYなどシックな色が好まれる。（図1参照）

3地点の過去5年間の全アイテムを3～8月を春夏、1、2月および9～12月までを秋冬として2シーズンに分けた場合、春夏に高く、秋冬に低い割合を示したものはPINK、BLUE、WHITE、反対に秋冬に高く春夏に低い頻度を示した色はRED、BROWN、GRAY、BLACKであった。原宿と渋谷での春夏のBLUEおよび、銀座の秋冬のBROWN、GLAYの高頻度が地域的な差となっている。

・経年変化における色相の頻度分布

1994～99年までの経年変化で見た地点別のおもな色相の特徴をあげると、原宿・渋谷は類似の傾向があり、REDでは96年を底、98年をピークとして大きく変化している。BLUEでは漸増傾向にあり、特に渋谷のBLUEは96年と99年の差が約2倍となっている。一方、BLACKは95年と99年とでは半分に減っており、BLUEとBLACKとは相互に反比例の関係がみられる。さらに原宿と渋谷では、出現率1～2%の低頻度色のORANGE、BLUE GREEN、PURPLEでも、ORANGEで97年、BLUE GREENで98年、PURPLEで96年を境に上昇している。これは、90年代に入り黒中心のモノトーンブームが長く流行していたが、98年頃より色を積極的に使うことが顕著となっている現況と一致している。

銀座では、BLACK、GLAY、WHITEが上昇した結果、相対的にBROWNが96年をピークに逡減している。3地点ともに98年にGLAYが高頻度を示しているのは、秋冬ファッションのロングブリーツスカートなどでグレーが流行色して注目されたことによる。3地点ともにBLACKは95

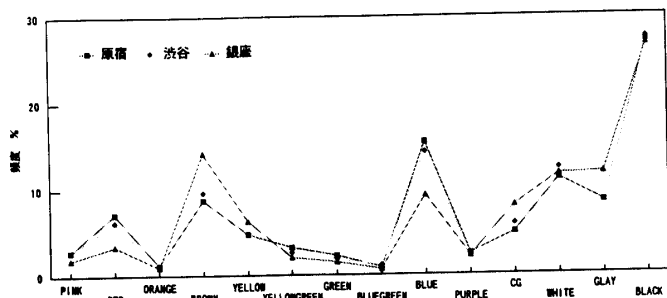


図1. 原宿、渋谷、銀座における5ヶ年の色相別出現頻度

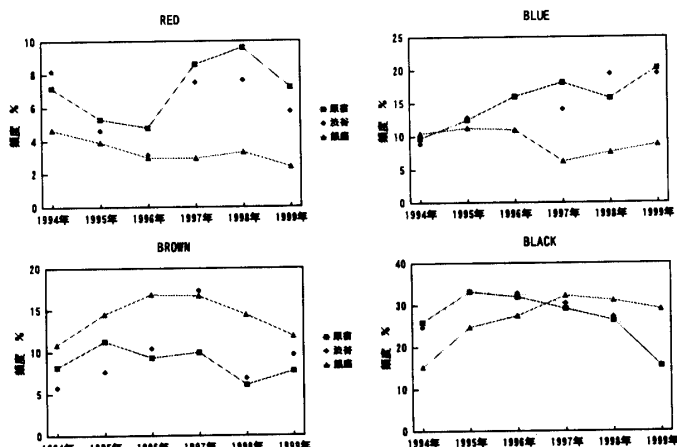


図2. 原宿、渋谷、銀座における1994年～1999年の色相の経年変化

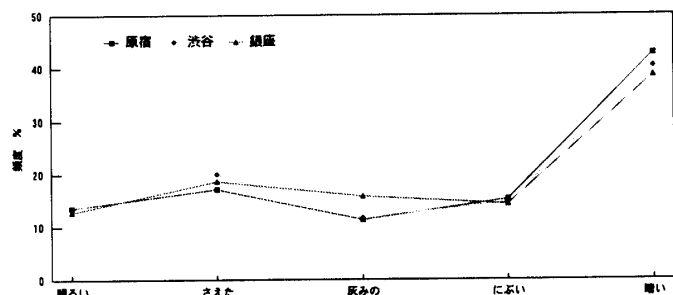


図3. 原宿、渋谷、銀座における5ヶ年のトーン別出現頻度

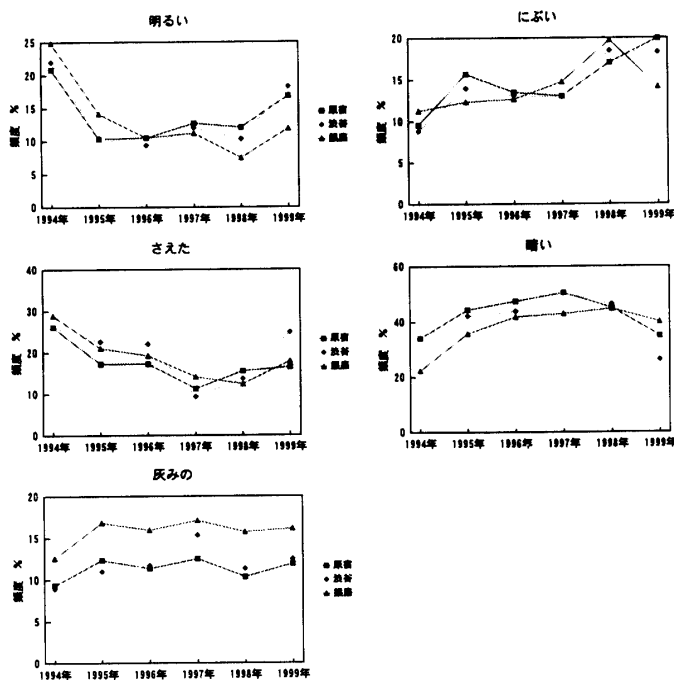


図4. 原宿、渋谷、銀座における1994年～1999年のトーンの経年変化

年頃では30%以上の出現を示していたが、原宿・渋谷では95年を境に減少が続き、99年ではピーク時の半分以上となっている。銀座では、97年から通減傾向にあり、この黒離れのトレンドはさらに続くものと考えられる。

(図2参照)

3-2. トーンにおける地点別の服装色の相違

・トーンにおける共通の傾向

トーンにおいても過去5年間の3地点の全アイテムを集計した結果、トーン別出現頻度の割合は、暗いトーンを除き10～20%以内で推移している。また、灰み・にぶい・暗いトーンを合わせた割合が68.2%と高い値を示していることから、服装色として着用されるものの多くは、低～中明度で低彩度のものが主流で、中明度で高彩度のビビッドなものは数少ないことが分かる。暗いトーンの割合が飛びぬけて高いが、大半はダークブルーと黒によるものである。(図3参照)

・原宿・渋谷・銀座の地点別のトーンの相違

原宿では、明るいと暗いの頻度が高く、トーンの割合からもコントラスト配色が好まれていることがうかがえる。渋谷は、さえたトーンの割合が高く、女子高生を中心としたギャル系ファッションで色鮮やかなピンクのミニドレスなどが好んで着用されている結果と考えられる。銀座では、灰みのトーンが原宿・渋谷を引き離して高く、大人の雰囲気のあるグレイッシュトーンが好まれている。(図3参照)

5年間の3地点の全データを春夏と秋冬との2シーズンに分け、トーン別に出現頻度を求めた結果、春夏に高く、秋冬に低いのはさえたトーンであり、反対に秋冬に高く、春夏に低いのは暗いトーンであった。明るい、灰みの、にぶいトーンでは季節差はあまりみられない。渋谷は、さえたトーンで、秋冬の減少率が3地点で最も少なく、寒い時にもブライトな服を好む傾向がある。銀座は、もともと3地点中最も割合の高い灰みのトーンが、秋冬にはさらに差が増幅している。

・経年変化におけるトーンの頻度分布

5年間のトーンの経年変化では、渋谷ではさえたトーンの97年以降の上昇が顕著である。また3地点ともに暗いトーンが97年をピークに下降を続けており、下降率は渋谷、原宿、銀座の順となっている。これらの結果からも、無彩色からあざやかな有彩色に次第と嗜好が移っていることが分かる。(図4参照)

4. おわりに

ストリートファッションの服装色を地点別に数量的に考察した結果、原宿・渋谷・銀座固有の嗜好色の存在が明らかとなった。各地点のクラスターの違いが好ましいと思う服の色に反映した結果、このような差が生じたものと考えられる。なお発表では、各種情報機関より提案される流行予想色と各地域の服装出現色との比較を付加する予定である。